

学校を舞台に、教師と子どもたちとの触れ合いや葛藤を描いたテレビドラマと言えば、どんな作品を思い浮かべるだろうか。「3年B組金八先生」「熱中時代」「女王の教室」「ごくせん」等々、最近では「ドラゴン桜」も入るだろうか。昔からたくさん学園ドラマがある。

これらには、定石ともいえるべき、一つのパターンがある。毎回、様々な問題を抱えた特定の子どもが主人公となり、先生と深くかかわるというものである。この定石に基づいて、教師は1時間の尺を使い、その子に徹底的にかかわり、深い一言をもって私たち視聴者の心を打つ。例えば「女王の教室」では、「阿久津真矢」先生が発した次の言葉がそうである。「なぜあなたが人から愛されないのか分かる？ あなたが誰も愛そうとしないからよ！」

毎回、学園ドラマの主人公となる子どもは、独特の家庭環境や人間関係、または秘密の過去を抱えたキャラクターとして描かれる。それらが学校における当人の生活態度や学びに影を落とし、教師はその影を手がかりに、主人公の子どもとかかわっていく。この構造自体はリアルである。

ドラマで描かれる人物は虚構の産物である。しかし、同じ教室に集う子ども一人一人が、他の子とは異なる環境や生活経験を持ち、独自の苦しみや悩みを抱えて生きる姿は、現実の教室でも変わりはない。

そこで考えた。私たちの授業も、毎回「今日の主人公はこの子」という思いで進めるとどうだろうか。「一人に捧げる」授業をするのである。「今日のこの授業は〇〇さんに捧げる」である。

授業で特定の一人を主人公としたら、本人には悟られないように、いつもの授業をいつものように進める。ただし、先生の目は、ひっきりなしにその子に向いている。そして、その子が今何を考えているのか察し続ける。子どもを注意深く見つめる姿は、個を大切にしている先生のまなざしとして、他の子どもたちにも好意的に伝わるだろう。

学園ドラマがそうであるように、主人公はどんどん入れ替わる。そうして卒業式を迎えるのである。すべての子どもが一度は主人公を経験して巣立っていく学級を想像してみると、どうであろう。その感動たるや、他のどの職業でも経験できるものではないだろう。

大勢の人を前に話すときに、その会場のたった一人をターゲットにして話した方が、いい話ができると勉強したことがある。100人に向けて話しているように見えるが、実は〇〇さんに向けて話しているということである。これも、一人に捧げる授業と同じことだろう。

では、私が毎回、主人公が入れ替わる授業をしてきたのかと言うと、答えは「いいえ」である。今考えると、やればよかったと思う。中学校の国語の授業は、年間100時間から140時間もある。やろうと思えばできただろうし、得るものも大きかったのではなからうか。今となっては、後の祭りである。

授業の話なのだから、毎週金曜日に野田中学校の先生方に配布している「職員室だより」に載せてもいいのだが、どうも躊躇してしまった。一人に捧げることで、みんなが生きているということ、主人公を替えながら時間をかけて全員を大切にすることを、果たして理解してもらえるだろうか。先生方を納得させるだけの文章を書くことができるだろうか。そんなことを考えてしまった。主人公のいる授業、わるくないと思うのだが。